

## 西洋史研究者のためのパソコン作法入門

古谷大輔・工藤晶人

### 0. はじめに

1990年代は、コンピュータがわたしたちの生活環境と“パーソナル”な関係を築いた時代だったと振り返ることができるでしょう。パーソナルコンピュータ(以下、パソコンと略)の登場と普及は、わたしたちの生活環境に確実な変化をもたらしつつあります。たとえば、パソコンを手にした人なら誰もが、世界中のあらゆるところから発信された情報に居ながらにして接することができ、それに応えながら自らも情報を即座に加工して発信できるということ。それだけを取りだしてみても、これまでの歴史では見られなかった現象といえるでしょう。

西洋史学の分野でも、研究者のみなさんの心の中に、コンピュータ利用にともなう変化の波が訪れているとの意識が強くなっていることと思います。多くの方々が、コンピュータを研究活動の道具として活用したい、という思いを懐いていることでしょう。しかし、現時点では、パソコンにはまだまだとっつきにくい点があるのも事実です。すでにパソコンを利用している人のうち、どれくらいの人がワープロや電子メール以外の機能を有効に活用して研究を進めているのでしょうか。あるいはパソコンをこれから使ってみようと考えている人の中には、パソコンをどのように準備し活用したらよいのか、不安を抱えている人も多いのではないのでしょうか。パソコンは研究を効率良く進めるための道具であるはずなのに、その準備と習熟にばかり多くの時間を費やすとしたら、本末転倒な行為と言わざるを得ません。

今回のこの文章は、歴史学の方法論とコンピュータの関わりを考察するといった、すでにコンピュータに慣れ親しんだ人々を対象としたものではありません。むしろ、研究のスタイルに関わらず、思考の道具としてパソコンを活用することを念頭に置いています。そして、そのために役立つ知識や、パソコンを導入する際に知っておくべきことだけをまとめた文章です。パソコンの扱いに習熟した方々には物足りない、あるいは冗長に感じられる部分もあるかもしれませんが、その点はあらかじめご容赦ください。以下、全体を「準備編」と「実践編」の二部に分けて説明していきます。前半ではパソコンの購入前に知っておくべき基本的な情報を整理し、後半ではパソコンソフト(アプリケーション)の利用法を紹介します。

### 1. 準備編

#### 1.1. パソコンの形状

まずは肝心のパソコン本体についての説明からはじめましょう。

パソコン本体は、その形状から大きく二つの種類に分けられます。1)パソコン本体が大きな箱状のものになっていて、外部モニター(画像を表示する装置)に接続して使うデスクトップパソコンと、2)本体と液晶モニターが一体になっていてコンパクトなノートパソコンです。ノートパソコンにはいくつか種類があります。デスクトップ型のパソコンと性能的な差がほとんどなく、A4サイズほどの大きさで本体の重さが3~4kgあるいわゆる「ノート型」がそのひとつです。そのほかに、フロッピーディスクの読みとり装

置などは内蔵されていないかわりに、B5サイズで本体の重さが1.5～2kgくらいの「サブノート型」や、さらに小さく、VHSのビデオテープサイズからB5サイズくらいで本体の重さが1kgほどの「ミニノート型」などがあります。

パソコンは、本体の形のほかに、機械の構造などの違いにより、「DOS/V(ドス・ヴィ)」と「Macintosh(Mac)」という規格に大別されます。それらの違いを理解するには、機械の構成やオペレーティングシステムとはなにか、ということを知る必要がありますので、以下にそれらの説明をします。

## 1.2. CPU・メモリ・ハードディスク

デスクトップにしるノートにしる、DOS/VにしるMacにしる、パソコンの性能を判断する基準として、CPU・メモリ・ハードディスクという言葉をもっと最低限知っておく必要があります。

CPUとは中央演算処理装置(Central Processing Unit)の略称で、データ処理をつかさどる、いわばパソコンの心臓にあたるものです。現在、パソコンに使われているCPUは、インテル社が開発した「Pentium」系統のものと、モトローラ社が開発した「PowerPC」系統に分類されます。これらは、それぞれ特定のオペレーティングシステム(OSと略す。これについてはOSの個所で説明します)と組み合わせて使われます。前者は、Windows95というOSと組み合わせて、DOS/V(DOS/Vにかわる新規格として「PC98」という規格もありますが、実質的にはDOS/V同様のものと考えてよいでしょう)規格のパソコンに使われています。後者は、MacOSと組み合わせて、アップル社のMacintoshというパソコンに使われています。つまり、下のような対応関係があるわけです。

規格(CPU)	オペレーションシステム
DOS/V (Pentium) (IBM、NEC など各社)	Windows (マイクロソフト社)
Macintosh (PowerPC) (アップル社)	MacOS (アップル社)

CPUの性能は、メガヘルツ(Mhz)という周波数の単位であらわされます。これは、いわばエンジンの馬力にあたるもので、この周波数が高ければ高いほど、処理速度が上がります。166, 200, 233Mhzといった33の倍数や、180や240とって60の倍数が用いられることが多いようです。ただし、これらの数字が2倍になったからといって速さも倍になるわけではありません。われわれが研究に用いるには166～200Mhzくらいで十分でしょう。

メモリとは電子的な記憶装置のひとつで、プログラムが実行されているときに、一時的にデータが保存されている場所です。メガバイト(MB)という単位でその容量があらわされます。メモリは、いわば一度に本やノートを広げることのできる机の面積のようなものです。量が増えれば増えるほど一度に扱える情報量が多くなり、処理能力に余裕ができます。

ハードディスクは巨大なファイルを記憶するための装置で、メモリとは違ってパソコンの電源を切ってもデータを保存しておくことのできる場所をいいます。こちらは、ギガバイト(GB)という単位で容量があらわされます。ハードディスクの容量が大きければ大きいほど、パソコン自体に記憶させておけるデータの量が増えます。ハードディスク

は、いわば本棚や引出しのように情報を整理して保存しておく場所だと考えればよいでしょう。メモリとハードディスクの種類による性能の差はほとんどありません。メモリは48～64メガバイト(たいてい16の倍数になっています)、ハードディスクは2～3ギガバイト以上あれば不便はないでしょう。

### 1.3. オペレーティングシステム

次にパソコンを利用する上で欠かすことのできないOSについて説明します。OSとはオペレーティングシステム(Operating System)の略で、パソコンの電源をいれたり消したりといった基本的な機能をつかさどり、ワープロなどのさまざまなアプリケーションソフトを動かす土台になる存在です。(アプリケーションとはなにか、ということについては実践編で述べます)ですから、パソコンを活用するには、まずOSの操作法を習熟しなければなりません。OSには、DOS/VとMacのそれぞれに対応して、マイクロソフト社が開発しているWindows95(この夏にはWindows98という新版が発売される予定です)とアップル社が開発しているMacOSがあります。MacOSとWindowsは、パソコン市場を二分して競合する関係にあります。

MacとWindowsは、基本的な操作方法はほとんど同じです。この点について両者のどちらがよいかは、研究者各人の好みの問題になります。かつては、英語以外の外国語(ドイツ語、フランス語、ロシア語、ギリシャ語など)を処理する能力においてMacOSが一步先を行っていました。しかし現時点ではそれほど差はなくなっています。外国語と日本語を併存させられるかどうかは、OSよりも、むしろアプリケーションの機能に依存していると考えべきです。

なお、WindowsとMacは異なったOSであるとはいっても、両者の間でデータのやりとりをするのは難しくありません。ただし、転送したデータの内容がそのまま共用できるかどうかは、ワープロやデータベースといった個々の個々のアプリケーションがデータ内容を変換する機能を備えているかどうかによります。ここでもやはり、アプリケーションの選択が問題になるわけです。

### 1.4. 周辺機器

次にパソコン本体以外の周辺機器の説明に移りましょう。まず最初に揃えておくべき周辺機器としては、プリンタとモデムがあげられます。

プリンタがなくては印刷ができません。個人で購入できるプリンタとしては、カラー印刷が可能で値段の安い「インクジェットプリンタ」と、モノクロ印刷しかできないものの印字の速度と美しさに定評のある「レーザープリンタ」が一般的です。両者ともにA4サイズの紙まで印刷できるものが、普通に売られています。プリンタを購入する際は、dpiという値(たとえば360とか1200といった数値があり、これが大きくなれば印字精度も高くなります)と1分あたりの印刷枚数(A4版で3から6枚程度)を基準にして選ぶとよいでしょう。最近のプリンタはDOS/VでもMacでも使えるものが増えてきています。

モデムは、パソコンを使って他のコンピュータと通信するために必要な装置です。電子メールをはじめとするさまざまなインターネットの機能を利用したり、パソコンをFaxとして利用する際に必須となります。現在では、購入時に本体に内蔵される場合が多くなりましたが、そうでない一部のパソコンでは別途購入することになります。モデムの性能は、DOS/VでもMacでも、bps(またはkbps)という単位(一秒あたりに通信できる情

報の量をあらわしています)であらわされます。一般的な電話回線を利用する場合、現時点では56000bps(56kbps)が最高値ですが、電子メールやFaxを利用する程度ならば、33600bps(33,6kbps)や28800bps(28,8kbps)といった速度のものでも十分です。デスクトップパソコン用には箱形のモデムが用いられます。その際、本体がDOS/VかMacかによってモデムと本体を接続させる形式が異なりますので注意してください。ノートパソコン用には、「PCMCIA」という規格にそったカード型のものが用いられます。

そのほかの周辺機器としては、スキャナーやMOドライブなどがあります。後者は、ハードディスクに貯蔵されているデータのバックアップ(保存用の複製)をとるための装置です。スキャナーは、画像や文書を電子情報に変換し、パソコンで利用できるようにするものです。図像や地図だけでなく、印刷物を文字データに変換して、パソコンで利用することもできるようになります。スキャナーは、コピー機のような形状をしたものが一般的で、数万円程度の低価格の製品でも十分な性能を持っています。

## 1.5. なにを準備するべきか

### 1.5.1. Macintosh か Windows か

それでは、以上のような知識をもった上で、西洋史研究者は、どのようなパソコン環境を整備すればよいのでしょうか。まず、Macintosh か Windows のどちらを選ぶべきか、考えてみましょう。OSのところでも述べましたが、西洋史研究者にとって、Windows と Mac のどちらかが圧倒的に有利ということはないでしょう。多言語処理の問題でほとんど両者の性能に差はありません。データのやりとりについても問題はありません。これらの問題は、最終的にMacOSやWindowsで実行できるアプリケーションの機能によって左右される問題です。

Mac と Windows のちがいをまとめてみましょう。まず、Windows はパソコン市場で圧倒的なシェアを占めています。そのため、Windows 用には最新の多機能なアプリケーションがそろっていますし、相談できる人が身近に多いかもしれません。こうした点を重視するならば、Windows を選ぶのがよいでしょう。しかし、Mac に根強い支持があるのもたしかです。その理由の一つは、MacOS が初心者にも使いやすいという点があります。操作方法の違いは少ないのですが、プリンタやスキャナー、モデムといった周辺機器を増設するのは、MacOS のほうが簡単です。また、古典古代史研究のように、MacOS に対応したデータベースの構築が大きく進んでいる分野を専攻しているのならば、Macintosh を選ぶのがよいでしょう。

### 1.5.2. デスクトップか、ノートか

これも結論からいえば、どちらを選択しても研究を進めるうえで困るということないでしょう。それぞれの長所と短所を簡単にまとめてみると、次のようになります。デスクトップパソコンには、基本的な装置がすでに内蔵されていて、小型のノートのように面倒な接続の手間がない、という利点があります。さらに、一度に多くの周辺機器を接続できるという利点があります。また、画面やキーボードが大きいので長時間の作業も比較的楽に行えます。一方ノートパソコンには、持ち運びができ、狭い場所でも利用できるという利点があります。たとえば、ノートパソコンならば図書館や文書館などへ持ち運んで使うことができますし、海外に持ち出すこともできます(その場合は、海外の電圧に対応した機種をえらんでおくように注意しましょう)。

ただし、ノートパソコンの可搬性に過剰な期待は抱かないことです。3～4kgもあるノートを携帯するのは楽ではありませんし、もっと小型のノートパソコンは、携帯はできてもバッテリーの持続時間がせいぜい2時間程度と短く、長時間使用するためにはコンセントにつながなければなりません。その上、ノートパソコンはデスクトップパソコンより一般に高価です。同じ程度の能力をもつノートとデスクトップの値段をくらべると、およそ10万円程度の差がつきます。ノート型特有のメリットが投資に見合うものかどうかは、各人の判断の分かれるところでしょう。

結論としては、資金に応じて三通りの買い方が考えられます。1)もしも資金に余裕があるならば、小型のノートとデスクトップの両方を購入してしまえばよいでしょう。2)もうすこし予算を抑えて、比較的軽量でありながら画面やキーボードも大きい2kg程度のノート型パソコン(「スリムノート」などと呼ばれることがあります)を一台購入し、ふだんは自宅に据え置いて使い、必要なときだけ持ち出すことにしてもよいでしょう。

3)さらに予算を抑えたいときには、安価なデスクトップパソコンを購入しましょう。そして、どうしても外出先でパソコンのデータを利用したくなるときには、携帯情報端末(PDA)を別途購入すればよいでしょう。こうした端末には、電子手帳のようなものから小型のノートパソコンのようなものまでさまざまな種類があり、いずれもパソコンにくらべて機能が限られるだけ、比較的廉価で売られています。また、何時間も、ときには何十時間もつづけて使えるのも特徴です。

いずれにせよ、パソコンの環境を整備する際に重要なことは、個人の研究環境とスタイルにあわせて選択するということです。現在のパソコンの環境は、どれを買っても、なにを使っても、たいていの西洋史研究に必要な作業は可能です。高価なパソコンを購入する必要はありません。本体にかかる費用を抑えることができれば、そのほかのパソコン機器や、大切な文献を買うための余裕も生まれるのですから。

## 2. 実践編

ここからは、パソコンをつかった論文作成のプロセスを例示し、西洋史研究に適したアプリケーションの利用法を紹介します。

### 2.1. アプリケーションの利用

われわれが論文を書きあげるまでにはいくつかの段階があります。ここでは、文献と史料の収集、ノートやメモの整理、本文の執筆の三段階に分けて考えてみましょう。かりにこれらすべての作業をパソコンでやってしまうとしたら、どのようなアプリケーションが必要になるのでしょうか。もちろん、これらの作業をどこまでパソコンで行うかは、個々人の選択に任されています。実際にはパソコンよりも紙と鉛筆を用いるのが便利なこと多いでしょう。以下に紹介するプロセスは、あくまでもひとつの参考例として考えてください。

ところで、そもそもアプリケーションソフト(たんにソフトということもあります)とはなんですか。ごく簡単にいえば、OSがパソコンの基本的な機能をつかさどるものであったのに対して、アプリケーションとは、もっと応用的で具体的な機能を提供してくれるもののことをいいます。たとえば、ワープロやデータベース、電子メールなどの機能はすべてアプリケーションソフトがつかさどるものです。アプリケーションの多くは、CD-ROMに記録されています。これをパソコンに挿入して、インストール(据え付け

る、とでも訳しておきましょう)することによってパソコンはさまざまなはたらきをするようになります。パソコンとアプリケーションの関係は、たとえていうなら、CDプレイヤーが挿入されたCDに記録された情報(音)を読みとって、スピーカーを鳴らすようなものだといえるでしょう。それでは、われわれはアプリケーションを選ぶ上で、どのような点に注意すればよいのでしょうか。

まず、第一の条件は、広く普及していて、Windows版とMac版の双方が入手可能なアプリケーションを選ぶことです。アプリケーションには、同じ名前のものでWindows用とMacintosh用がそれぞれあります。たとえば、Wordというワープロソフトには、Windows用とMac用がそれぞれ売られています。こうした場合、Windows用とMac用のアプリケーションそれぞれ自体を使い回すことはできませんが、それぞれの機能に差はありません。そして、同じアプリケーションでつくったデータであれば、WindowsとMacの間でそのまま共用することができます。MacからWindowsへデータを送る場合、「MS-DOS形式(Windowsで普通に用いられている形式)」のフロッピーディスクを使えば簡単ですし、WindowsからMacへの転送もPC ExchangeというMacOS付属の機能により問題なくおこなうことができます。異なるアプリケーションの間でも、どちらかのアプリケーションにデータ内容を変換する機能が備わっていれば、それを利用することは可能です。しかし、同じアプリケーション同士のやりとりと比べれば、いちいち面倒です。また、広く普及しているアプリケーションのデータであれば、将来パソコンやソフトを取り替えることになっても、データを変換する機能が準備されているはずで、蓄積したデータを無駄にしないための予防手段としても、標準的なアプリケーションを選んでおくべきでしょう。

第二の条件として重視せねばならないのは、欧文特殊文字、すなわち、独仏語などのアクセント記号や、キリル文字、ギリシャ文字などをスムーズに入力できるか、という点です。これは、西洋史研究者にとってとても重要な問題です。実は、日本製のアプリケーションの中には、欧文特殊文字を入力することができないものが少なくありません。その理由は、おおよそつぎのようなものです。パソコンは、さまざまな文字の形を「フォント」というデータにして管理しています。たとえば、日本語の明朝体や、英語のSans Serifといった書体が、それぞれひとまとめになったものが、フォントとしてパソコンに記憶されています。パソコンは通常、日本語用のフォントをつかって文字を表示しています。しかし、日本語フォントの中には、英語で用いるアルファベットしか登録されていません。アクセント文字などは、欧文専用のフォントにしか登録されていないのです。このため、フォントを切り替える機能が十分でないと、上に述べたような問題が起こります。欧文特殊文字と日本語を両方入力するためには、機会に応じてフォントを切り替えて、両方のフォントを利用できるアプリケーションを選ばなければなりません。

以下、この二つの条件を中心にして、代表的なアプリケーションとその利用法を紹介していきます。

## 2.2. 情報収集とインターネット

パソコンをつかった情報収集には、ふたつのかたちが考えられます。ひとつは、CD-ROMなどに記録された、定型的な情報を利用するものです。ふたつめは、インターネット上に存在するさまざまな情報源を利用するものです。順に説明していきましょう。

CD-ROMに記録された情報には、多様な検索を瞬時におこなうことができるという利

点があります。これは、書籍にはない長所です。手軽に入手可能なものの例として、さまざまな辞書・事典類があります。「DDWin」(Windows用)「書見台」(Mac用)などの検索ソフトを用いる電子ブック規格のものと、専用の検索ソフトと一体になって売られているものがあります。日本製、海外製の語学辞書は、*OED*や*Grand Robert*などの大型辞書から小型の辞書までいろいろなものがあります。さらに、平凡社の『世界大百科事典』や*Encyclopaedia Britannica*などの百科事典も発売されています。また、近年では、学位論文などの書誌情報がCD-ROMで提供されることが増えてきました。これらは、個人で購入するには高価ですが、図書館などに備え付けられていることがあります。

つぎに、インターネットによる情報収集に移りましょう。ただし、インターネットそのものの説明はここでは省略します。インターネットを利用するには、大学や図書館のインターネットに接続されたコンピュータを用いるか、自宅からモデムと電話回線を介してパソコンを接続して、利用することになります。インターネット上では、国内、海外を問わずさまざまな情報が提供されていますが、その形態や内容も刻々と変化しています。ここでは国内のおもな情報源をとりあげてみましょう。現在、インターネット上では、学術情報センターの文献検索サービス(<http://webcat.nacsis.ac.jp/>)で、日本中の研究機関の所蔵図書を一括して検索することができます。また、日本で出版されている書物の書誌情報を調べることもできます(<http://www.trc.co.jp/>)。また、国内、海外の図書館の所蔵状況などをそれぞれのホームページをつかって調べることもできます。そのほかにも、洋書の通信販売などさまざまなサービスを利用することができます。海外では、研究成果をインターネット上で公表する活動も活発化してきています(<http://humanitas.ucsb.edu/shuttle/history.html>)。

インターネットとの接続には、ブラウザとよばれるアプリケーションを利用することになります。「ネットスケープ・ナビゲータ(Netscape Navigator)」と「インターネット・エクスプローラ(Internet Explorer)」のふたつが代表的なもので、どちらも無料で利用できます。大学などの研究機関では前者が用いられていることが多いようです。機能に大きなちがいはありません。はじめからパソコンに付属していたり、パソコン雑誌の付録などのかたちで配布されていたりしますから、気に入ったものを利用するのがよいでしょう。

### 2.3. 文献の管理

文献管理は、パソコンで行うのにもっとも適した分野でしょう。コンピュータでつくった電子的な文献カードは、手書きの文献カードの欠点をよく補ってくれます。手書きのカードでは、カードのなればかたや分類に難渋し、結局目的のカードは見つからないことなど日常茶飯事でした。しかしコンピュータをつかえばそのようなことはありません。カードの中にふくまれている語句を検索したり、条件にしたがってならべかえる、といった作業が容易になり、カードの数も実質的に無限に増やすことができます。また、文献カードを読書ノートとして用いるときにも、コンピュータであればカードの大きさを気にせず好きなだけ内容を書き込むことができます。

さらに、文献管理専用のアプリケーションを用いれば、いっそう高度な作業を任せることが出来ます。手作業で文献表や註をつけるわずらわしさは、どなたも経験されたことがあると思います。たとえば、人名の姓名のどちらを前にするべきか、アルファベット順のまちがいはないか、カンマのあとにスペースは抜けていないか、などなど、めん

どうなことのうえありません。しかし、文献管理専用のアプリケーションを使えば、既成の書式を選択するだけでこうした作業を自動的にやってくれるのです。

### EndNote Plus

海外において最大のシェアをもつアメリカ製の文献管理専用アプリケーションです。少々高価ですが、ワープロと連携して文献表の書式を自動的にととのえる機能はすばらしいものです。ラテン系文字を用いる言語は、原則としてすべて問題なく取り扱うことができます。しかし欠点もあります。まず、キリル文字は、基本的に使用できません。日本語は一応利用することもできますが、一部表示がおかしくなったりしますから、日本語で読書ノートをとるためのソフトとしては実用的ではありません。

### Bunso

EndNote Plus をモデルにしてつくられた日本製のソフトウェアで、無料公開されています。ただし Windows 専用です。日本語を問題なく取り扱うことができますし、文献表の書式をととのえる機能も十分に備えています。読書ノートを取るための機能も充実していますから、英語文献だけを用いるのなら、文献管理と読書ノートの作成を同時に一つのソフトで実現できます。しかし、欧文特殊文字の利用は制限されます。たとえば、画面上でそれを表示することはできても、ワープロに内容を複製したときにアクセント付きの文字が正常に表示されないこともあります。

### Excel

以上のふたつは文献管理専用のソフトでしたが、これらを使わない場合、表計算ソフトである Excel を利用することもできます。文献リストを一覧表にして管理するのが好む人にむいています。文献表の書式は自分で整えなければなりません。並べ替えや検索などの機能は利用できます。ただし、Windows 版では英語以外の言語の利用に支障があります。

### FileMaker Pro

Macintosh を使っている人に人気のあるデータベースソフトで、もちろん Windows 版もあります。ロシア語を含む欧文特殊文字と日本語の両方を取り扱うことができますから、文献管理と読書ノートの作成をひとつのアプリケーションでやってしまうことができます。文献管理専用のアプリケーションに比べて、カードの内容を検索したり、あるカードから別のカードを簡単に参照できるようにする、といった機能が充実しています。ただし、文献管理専用のソフトと違って、文献表の書式を整える機能はありません。

## 2.4. ノートやメモの作成

前節の内容と一部分重複しますが、読書ノートや構想メモなどをパソコンで作成することを考えてみましょう。パソコンで作ったノートには、手書きにはないいくつかの長所があります。第一に、過去に書いた内容を自由に検索できるようになります。たとえば、メモのどこかに含まれているはずのキーワードを、一瞬にして探し出したり、それがかかっている箇所を前後を一覧する、といったことが簡単にできるようになります。ノートを日付順、主題順に並べ替えたりすることも容易です。さらに、メモの内容をいちいち書き写さずに、論文に引用することもできます。

パソコンでノートを作るためによく用いられているのは、アウトラインプロセッサとよばれるアプリケーションです。これはもともとは、長文を章や節といった部分ごとに

分割し、その枝分かれを一覧したり、くみかえたりするためのソフトです。論文の構成を考えつつ、断章ごとに平行して執筆をすすめていく人にとっては、大変便利なものです。さらに応用すれば、メモ帳や読書ノートとして利用することができます。この分野では、Macintoshの「Acta7」というソフトが有名です。ワープロソフトにも同名の機能がありますが、かならずしも使い勝手のよいものではありません。

エディタというアプリケーションも、ノートの作成によく用いられます。Windowsでは「WZエディタ」以外に「秀丸エディタ」が有名です。とくに前者は、すぐれたアウトラインプロセッサ機能も備えています。Macでは「JEdit」や「シンプルテキスト」などが代表的なエディタです。エディタはワープロによく似ていますが、ワープロのように文字の体裁を整えたり、脚注をつけたりといった機能があまりありません。また、原則として日本語と欧文特殊文字を同時に入力することができません。そのかわりに、動作が軽快だという特徴があります。たとえば、ワープロを使っていると長い文章を表示するときにはいちいち待たされたりすることがありますが、エディタは、どのような処理をさせても待たされることはほとんどありません。さらに、エディタでつくった文書は「テキスト形式」になっています。これは、どのようなワープロソフトでも利用できる形式ですから、メモや草稿をエディタで書き、仕上げをワープロでおこなうという使い方ができるのです。

## 2.5. 論文の執筆

論文などの、脚注や体裁のととのった文書の作成には、ワープロをつかいます。前出のエディタでも文章作成はできますが、論文に不可欠な脚注や文字の体裁をととのえる機能はワープロに任せることになります。さらに、ワープロを使えば、目次を自動的に作成したり、図表を含む文書を作成したりすることもできます。ワープロは、われわれが論文を書くためにもっとも長い時間つきあうことになるアプリケーションだといえるでしょう。では、どのようなワープロが西洋史研究者に適しているのでしょうか。ここでは、さきに述べたアプリケーション選びの原則にしたがいましょう。第一に、広く普及した、Windows用とMac用の両方が入手できるソフトを選ぶことです。普及したワープロソフトは、周囲にも同じワープロを使っている人が多いでしょうから、文書のやりとりをするときに面倒な変換の手間がかかる、ということも少なくなります。さらに、外国語を取り扱う機能が優れていることも大切です。たとえば、ロシア語やギリシャ語がきちんと入力できないというソフトなどは選ぶべきではないでしょう。ここでは、条件を満たすふたつの代表的なソフトを紹介しておきます。

### Word

Windowsを開発したマイクロソフト社がつくったワープロソフトで、世界最大のシェアを誇っています。当然に利用者も多く、海外の雑誌では原稿をWordで作成するように求められることもあります。さまざまな外国語を問題なく入力でき、動作も比較的軽快です。また、Wordで作成した文書であれば、それ以外のほとんどのワープロソフトでも利用することができますから、作成した文書が無駄になることはありません。

### WordPerfect

Wordが普及する以前に海外で広く用いられていたワープロソフトです。英語以外の言語に対応した機能が充実しているのが特徴です。たとえば、独仏語やギリシャ語などの

規則にあわせてハイフネーションをおこなったり、各国語の綴りをチェックしたりする機能が充実しています。英語以外の言語に関する機能を重視する研究者にむいています。

### 3. さらに知りたい方へ

以上、パソコンをつかった論文作成の概略を紹介しました。最後に、パソコン関連書の選び方についてふれておきます。巷にはさまざまなパソコン関連書があふれています。これらの本を買うときには、あらかじめ調べたいことを決めておいて、その説明を簡単に見つけられるような本を選ぶようにしましょう。逆にいえば、なにを調べてよいかわからないうちは、「できる」「わかる」といった宣伝文句につられるべきではないでしょう。ここでは、三つの文献を紹介しておきます。まず、わかりやすくパソコンのしくみを解説した画期的な入門書として、サトウサンペイ著『パソコンのバの字から』（朝日新聞社、1998年）があります。インターネットの使い方については、アリアドネ著『調査のためのインターネット』（ちくま新書、1996年）が、また、この文章で紹介したアプリケーションの入手法など、よりふみこんだ内容については中尾浩他著『マッキントッシュによる人文系論文作法』（夏目書房、1995年）同『Windows95版人文系論文作法』（夏目書房、1998年）が参考になります。

パソコンは、日々の研究生活の中でもっとも接することの多い道具になることでしょう。ですから、なるべく自分の気に入った納得のいくものを用意して、快適な研究生活の構築を目指したいものです。この小文がその手助けになれば幸いです。